人

斉藤ひとみさんは、青年海外協力隊として、2001年から2年間、中米の小さな国、ホンデュラス共和国のオランチョ県で小学校教諭として活躍されました。
斉藤さんが教育現場で感じた体験談を紹介します。

ホンデュラスでの青年海外協力隊生活を終えて

斉藤　ひとみ

2001年の正月、『国際ボランティアもいいことだけど、俺がボランティアをしてもらいたい。』という父の半ばあきれた、そして、心配な顔を尻目に青年海外協力隊員になるため、長野県駒ヶ根市にある訓練所に出発しました。

あれから、2年半。中米の小さな国、ホンデュラス共和国のオランチョ県で小学校教諭としての活動を終え、4月の下旬に帰国しました。

帰国直後は携帯電話のカメラ機能に驚き、みんなが絶えず使う姿に異様さを感じ(今は、私も使っています。)コンビニの明るさに目が痛くなりました。(ホンデュラスには蛍光灯がほとんどありませんでした。)水道からは、いつも水が出るし、電気は停電にならないことに安心と喜びを感じました。あきらかに、ホンデュラスに行く前と日本に対する感じ方が違っていました。そんな自分に違和感を感じ、戸惑いました。ホンデュラスでの2年間は私の想像を越える刺激や考える材料を与えてくれたようです。

オランチョ県内のマベル先生宅にて

私が行っていたホンデュラスはメキシコのやや南に位置する北海道よりもやや大きめの国で国民のほとんどがキリスト教でみんな明るく陽気にのんびりと暮らしている国です。私は東部にあるオランチョ県教育委員会に配属になり、県内の小学校を巡回し先生方に算数のセミナーをしたり、学校で授業をしたりしていました。道路には車、人、馬や牛も通り、庭には鶏、犬、牛、馬、たまに豚がいる、のどかな所でした。はじめの頃は手で水を汲むと、力を入れているはずの指の間から水がこぼれてしまい、貴重な水を使っての皿洗いは免除され、みんなに笑われました。また、バケツ一杯の水でどこから、どのように洗ったら、全身が気持ちよく洗えるのかを真剣に考えました。

エリ先生と一緒に

教育現場では、教科書も充分にない現実や、家に食べるものがなく、お腹をすかしながら学習している子どもを見て、胸が詰まる思いをし、はだしで遊ぶ子どもたちが学校を楽しみにしている姿や家族と共に働きながら17歳で小学校を卒業するうれしそうな少女の姿を見て「教育とは、何であるのか。何が一番大事なのか。」を改めて考えました。

小学校での授業風景

また、充分に教育が営まれないと、どうなってしまうのか、目の当たりにしました。こういった現状の中で教育委員会の同僚や先生方や子どもたちと仕事をしながら彼らの常に明るく楽しく陽気で、何事に対しても自然体の姿勢に、学ぶことは多かったです。与えることよりも与えられたことのほうが遥に多かった2年間だったような気がします。

途上国で生活し、自分のできること、できないことに、ごまかしが効かない環境で否応なしに自分と向き合うこともできました。現地の人と生活し、異文化を肌で感じる一方、人とのコミュニケーションのとり方はどこにいても同じであり、外部者であることを自覚する中でホンデュラス人の優しさ、思いやりの温かさが身にしみました。また、生きることに貪欲で、生きていることに喜びを感じ生き長らえることに幸せを感じる人たちと一緒に生活し感じたことの中には、日本で忘れかけた大事なものがあるような気がします。

小学校の子ども達と一緒に

今は、すべてのタイミングが合い、協力隊員としてホンデュラスで生活できて本当によかったと思っています。また、支えてくれたホンデュラス人や都留で心配し続けていた家族に心から感謝しています。

現在は谷村第一小学校で非常勤講師をしています。この経験を活かせるような教員を目指し、途上国の子どもたちの写真を見て、かわいそうで終わるのでなくて、自分たちとは違うこんな世界もあるんだなと思える国際理解教育を目指したいと思います。